
路地裏いたち

椿谷羽里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
路地裏いたち

【Nコード】
N2514E

【作者名】
椿谷羽里

【あらすじ】
小学生のリユウキは学校帰りの路地裏で・・・

第1話（前書き）

初小説です。

第1話

ある曇った日、僕は友達と小学校から帰ろうとしていた。

四人並んで、田んぼの横をのんびり歩いていく。

しばらくみんなとはしゃぎながら歩いて、途中の曲がり角に来た時、僕はみんなと別れた。

「リュウキー、バイバイ。」

「またねー。」

「明日もサツカーやろうなー。」

「うん！バイバイ！」

笑顔でみんなに手を振って、少しの寂しさと一緒に曲がり角の先の路地裏に向かった。

はつきり言って、僕はこの狭い路地裏が苦手だった。

暗くて、じめじめしていて、大きな木が何本も生えていて気味が悪い。

カラスの巢もあるようで、通るたび不気味な声で鳴く。

何でそんなところを通るのかというと、単にここが家への近道だからだ。

他の道を行くと、結構遠回りしなくてはいけない。

面倒だし、団地は道がごちゃごちゃしていて分かりにくいから、お父さんやお母さんにもこの道を使いなさいと言われている。

そしていつも通り、そこを全速力で走りぬけようとした瞬間だった。

何か植物のつるのようなものに引っ張られたと思ったら、

一瞬真っ暗になって、元に戻った時にはそれまで聞こえていた音が聞こえなくなっていた。

驚いた僕は、立ち止まってきよるきよると周りを見回した。

さっきまで聞こえていたカラスの声も、僕の足音も、

木がざわざわいう音も全部聞こえない。

それに、音が聞こえていたときに感じていた不気味さが無い。

夢の中にいるような、ふわふわした不思議な空気。

曇っていたはずの空も、雲ひとつない綺麗な夕焼け色に染まっている。

突然のことに僕がパニックになって固まっていたら、

「ごめんなさい。急に連れてきてしまつて。」

と、どこからか声がした。

また周りを見回したけれど、人はどこにもいなかった。

「人じゃなくて、花。あなたの足元に咲いている紫色の花。綺麗でしょ。」

余計パニックになりながらも、自分の足元の花に目を向けてみる。

すると、紫色の花がここよと言わんばかりに左右に揺れた。やはり、音はしない。

「な・・・何で？嘘だ・・・。」

花がしゃべるなんて、教科書でしか見たことが無い。

僕は頭がおかしくなったのだろうか？

「嘘じゃない。ここはあなたの住んでいる場所じゃないの。」

言つたでしょ。連れてきたつて。」

くすくすと心底おかしそうに笑いながら花が言う。僕は少しむっとした。

だけど、僕の住んでいる場所ではないつてどうということだろう。

手を握り締めて、恐る恐る花に聞いてみる。

「ここはどこ？路地裏じゃないの？連れてきたつてどうということ？」

「いっぺんに質問しないで。とりあえずここは、るじうらつていう場所じゃない。」

連れてきたつていうのは、そのままの意味。あの子に頼まれて連れてきたの。」

「あの子？」

「そう、あの子。臆病だけど優しく素直でとってもいい子。会いたい？」

「え、う、うん。」

「わかった。出てきたら？キュウ。」

花が優しくどこかに呼びかけた瞬間、茂みの中から何かが出てきた。

それは、目がくりくりした普通のイタチだった。

僕の住んでいるところは田舎だから、イタチもよく見かける。

だけど、ここは普通の場所ではない。

もしかしたら・・・

「こ・・・こんにちは。」

僕の予想は外れていなかった。

第1話（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございました！

小説を書くのは初めてなのでつたなさの塊

かと思いますがどうぞよろしく願いますm（——）m

第2話（前書き）

小学校からの帰り道、苦手な路地裏を通り抜けようとしたリュウキ。突然別の空間に連れてこられて出会ったのは一匹のイタチだった。

第2話

そのイタチは、僕のほうをしつかりと向いて挨拶してきた。

毛に覆われて表情がないはずなのに、笑っているように見える。

僕がじつと眺めていると、イタチは僕の足元にやってきた。

赤茶色の毛並みが夕日に照らされてきらきらしている。

「君、リュウキだね?」

「は?」

何でこのイタチが僕の名前を知っているんだろう。

「リュウキでしょ?」

イタチが目を輝かせて聞いてきている・・・ように見える。

とりあえず頷くと、

「やつぱり。俺はキュウ。よろしくね。」

「はあ。」

そう言うと、イタチはすごく嬉しそうに僕の足に擦り寄ってきた。

くすぐったかったけど、可愛くて、なんとなくあったかい気持ちになる。

この場所の空気のせいなのか、キュウという名前のイタチのせいなのかは分からない。

さっきまで抱えていた不安が消えていくような気がした。

そして、気がついたらしやがんでキュウの頭をなで、

「よろしくね。キュウ。」

と笑顔で呟いていた。

僕はキュウと、近くの木の根元に座っておしゃべりを始めた。

とは言っても、僕がキュウを質問攻めにしただけだ。

僕は、僕の膝の上で丸まっているキュウに向かって声をかけた。

「キュウ、質問してもいい?」

「いいよ。答えられることなら。」

「ここはどこ？キユウは何で僕をここに連れてこようと思ったの？」

「この場所に名前はないよ。たまたまここにあるだけの場所。」

リユウキの生きている場所だってそうだよ。たまたまできて、そこに命が生まれただけの場所。」

「ふうん。」

全然分らない。

「で、リユウキを連れてきたのは、友達になりたかったから。」

それと、注意のため。」

「注意って？」

「今日から俺がいつて言うまで、リユウキが毎日行っているところ以外では

絶対に走らないで。お願い。」

キユウが僕の目をじっと見つめながら言った。

普通に見たらすごく可愛いけど、キユウの目は必死そうだった。

「うん。わかった。」

「約束だよ。」

「うん。」

僕がそう言つと、安心したのかキユウは僕のお腹に擦り寄ってきた。くすぐつたい。

「そういえばキユウには友達はいないの？」

「いるよ。いつも誰かが遊んでくれるんだ。」

「でも、キユウと同じイタチはいないの？」

「いないよ。俺しかその『イタチ』はいない。」

「寂しくないの？」

「全然。みんながいるからね。似たような見た目をしてなくちゃいけない理由も無いし。」

「そっか。」

でも僕だったら絶対不安になる。人がいないなんて考えられない。どうしてキユウはそんな風に思えるんだろう。

「リユウキは、俺が『イタチ』だと不安？」

「そんなことないよ。こうやって話せるから。」

「話せないと駄目なの？」

「えっ？」

「話せなくても、いつでも誰かが何かを伝えようとしてるんだよ。」

リュウキが気付かないだけで。」

「そうなんだ。」

「うん。だから、リュウキももう少し耳をすまして聞いてあげてね。」

「わかった。やってみる。」

キュウの言うことは難しい。難しいのに、心のどこかでわかる気がする。

ふう、と一息ついて空を見上げてみる。相変わらずの夕焼け色。

でも少しずつ暗くなってきているようで、太陽の反対側が薄い紺色になっていた。

「キュウは、どうして僕と友達になろうと思ったの？」

「リュウキの空気が綺麗だったから。」

またよく分からないことを言われた。僕がその意味について一生懸命考えていると、

キュウがまた続けてきた。

「いつも楽しそうで、透明で月みたいに優しく光ってたから近づきたくなっただ。」

「わからないよ。」

「こういうのはなんとなく、だよ。リュウキにならきつと見えるよになるよ。」

「へえ。」

とりあえず、褒められているような気がしたから、

「ありがとう。」

と言ってキュウをなでた。やっぱり可愛い。

気がつく、日がだいぶ落ちかけていた。

「キュウ、僕そろそろ帰らなきゃ。」

「そうなの？」

キュウが寂しそうな声を出す。

僕だつて寂しい。でも帰らないとお父さんとお母さんにしかられる。

「うん。ごめんね。」

「いいよ。また明日も来てくれる？」

「もちろん。毎日行くから。」

最初はパニックになっていたけれど、僕はキュウが好きになっていった。

今日初めて会つて少ししか話していないのに、今まで会ってきた友達の誰よりも居心地が良かった。

キュウは嬉しそうに僕のお腹に擦り寄つてから地面に降りた。

僕も立ち上がつてうーんと背伸びをする。

そして、大事なことを思い出す。

「帰れない……。」

呆然とする僕に対して、キュウが優しく話しかける。

「大丈夫だよ。俺が元の場所に戻してあげるから。」

そう言つとキュウは、僕の後ろに向かった。

「バイバイ、リュウキ。約束忘れないでね。」

返事をする暇もなく、キュウがジャンプして僕の背中に体当たりをした。

一瞬来たときのように真つ暗になった後、僕は元の薄気味悪い路地裏に立っていた。

こっちの空は曇つたままで、真つ暗になっている。

なんとなく怖くなった僕は、慌てて家まで走つていった。

第2話（後書き）

自己嫌悪にめげず（懲りず）に書いた第2話です。

読んでくださった方、本当にありがとうございます！

完結に向けて頑張りますので、どうぞよろしく願いますm（
—

m（
—

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2514e/>

路地裏いち

2010年10月9日22時10分発行